「遊び」雑感　その五

好きな遊びを通して他児と出会う

吉村　真理子

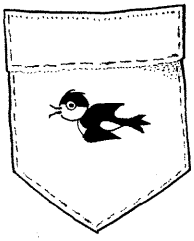
戸外に出てみよう

多彩だった新芽の色が次第に若葉の緑に変わる五月。園庭にはさわやかな光と風の中で入園当初の混乱を通り抜け、それぞれに自分のやりたいことを見つけて遊ぶ子どもがあふれている。そう、五月の遊びはこの気持ちのよい戸外で思い切り身体を動かす喜びと解放感にまさるものがあるだろうか。

気温が上がるにつれ衣服を少しずつ脱いでいくように、子どもたちは家庭からの束縛をほどいていく。「そんなことしたら汚れるでしょ」「あぶな

いから登ってはだめ」という声はもう聞こえない。砂場に池をつくるためにバケツで水を運んでいる子の足は泥だらけ、しゃがんで砂を掘っている子のズボンの裾も水浸し。保育者がシャツやズボンの裾をまくりあげてやってもとても追いつかない。「おーい、水もっといるぞ、早くはやく」「だれか手伝ってよ」といつのまにか知らない子ども同士が遊びの仲間に加わっている。

五月の子どもの様子は、園生活にも慣れ、それぞれが自分の好きなことに取り組んで遊び始めている頃だ。次の保育目標は、そこで共通の興味をもった子どもたちが出会い、友達関係が結ばれるような環境を用意して経過を見守っていくことである。ブランコ、ジャングルジム、すべり台などの固定遊具で、あるいはうさぎ、にわとり、小鳥、金魚などの飼育物にかかわりながら子ども同士は親しくなっていくが、ここでは、どの園でも普通に見られる砂場での遊びを例に、そのことをどう見るかについて考えてみたい。



感覚の楽しみから試行錯誤へ

砂場は多様な目的に適う格好の遊び場である。四歳で入園したHは、何をしようかと思い迷いながら砂を掬ってはさらさらこぼしているうちに「そうだ、お山をつくろう」と自分のやりたいことが次第に形になっていくおもしろさを体験する。山をもっと高くしようとてっぺんに砂をかけても流れ落ちてしまいなかなか大きくならない。周囲を見回すと年長児がじょうろで水をかけながらぺたぺた叩いて固めている。あんな風にするのかとカップで水を運んできたが小さな窪みができ

ただけ。

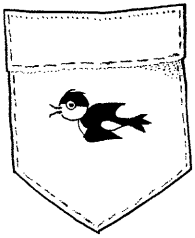
それを見ていたGが「いっしょに作ろうか」とじょうろで水を運んできた。Gも年長児のような高い山を作りたかったのだろう。二人でせっせと水を汲んできたので山はセメントこね場のようになってしまい、「ぐちゃぐちゃだ」とはだしでこねまわしている。「おもちみたい」「おだんごつくれるよ」と今度は手で握ったり丸めたりし始めた。「何作ってるの、わたしも入れて」とE子がやってきて「ねえ、おにぎり屋さんになろうよ」と、砂場のふちにだんごのようなものを並べ、小石を梅干し、葉っぱを海苔だよといいながらのせている。E子のアイディアをおもしろがってHもGもトッピングにする材料を探しに行く。おにぎり屋の発想が人気を集め、しばらくはいろいろな子どもが仲間に加わったり行きずりの子どもが買いにきたりでにぎわっていた。

女の子たちはトッピングを飾るおもしろさからか、いつのまにかケーキ屋に商売替えをしてケーキのデザインを工夫することに夢中になっている。最初は山を作りたかったHとGだが、おにぎり作りもなかなかおもしろく、女の子といっしょに握りやすい砂の堅さを工夫したり型抜きに使う茶筒のふたなども見つけて楽しそうに遊んでいた。

イメージをふくらませる

しかし、年長児が他の遊びをするために砂場から引き上げてしまうと、HとGは年長児が残していった大きな山のそばに行き、賛嘆の表情で撫でている。こんな山を作りたかったのだ。これは五、六人グループの労作でとても二人の四歳児の手では無理なのだが、そこで遊ぶのが嬉しいとみえ、木切れを人間に見立てて山に登らせたりすべ

らせたりしている。そのうち、道をつくりそれが川のイメージになったのか棒切れを見つけて橋をかけ「がらがらどんだ（註）」といいながらHがさっきの木切れをもって渡らせていると、Gがトロルになって「だれだ、おれのはしをがたがたさせるやつは」とどなっている。二人はその場面がよほど気に入ったらしく、そこだけ何回も繰り返してはゲラゲラ笑っている。笑い声に誘われて寄って来た子どもたちが、だれが大きいがらがらどんになるかで言い合いになり、とうとう橋も川もめちゃめちゃに壊してしまった。（註　絵本『さんびきのやぎのがらがらどん』北欧民話、マーシャ・ブラウン絵、瀬田貞二訳、福音館書店刊行、昨日担任がおべんとうの後でみんなに読んで聞かせた）



子どもの行動の意味を理解する

この一連の経過を見ていると、遊びに一貫性がなく状況によってくるくる変わっているように見えるが、五月の四歳児としてはこれで十分豊かな遊びではなかろうか。

仮に、保育実習生（保育経験がほとんどないというほどの意味）がこの場面の指導を任されたとしたら、Hの最初の行動（ただ砂をもてあそんでいる）を見て「さあ何を作ろうかな、お山にする？　それともお池にしようか」などと砂遊び道具のシャベルを出してやったかもしれない。それでは遊びの方向づけをしてしまい自分で考える機会を奪うことになる。

また、水を加えようとカップで運んでいるのを見たら「先生が手伝ってあげるからこれにお水を入れて来て。少しずつかけながら叩くのよ」と、

じょうろを渡したかもしれない。そうすると、試行錯誤の経験がもてないばかりか、たとえ立派な山ができても本人は達成感が味わえないのではないか。

おにぎりやケーキを作り始めたのを見たら、看板やお金を作るアイディアを出してお店屋さんごっことして発展させようと思うのは短絡的で、現在の子どもの興味は作ることであり、まだお店の形や販売の仕方には関心が及んでいないことに気づくべきである。

「がらがらどん」ごっこは、よくぞ昨日の絵本を覚えていて遊びに取り入れてくれたと感激し、ぜひ劇遊びとして役割を決めて筋書きどおりに展開させたいという誘惑に勝てないのではないだろうか。これは実習生でなくても、熱心な保育者の陥りやすい落とし穴と言えよう。落とし穴とは、遊びをより良く発展させようと「おせっかい」になるような援助をしたがることである。

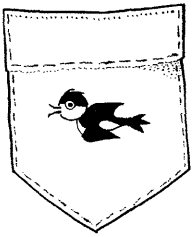
保育のねらいを確認してみる

先にあげた砂場のひとこまは五月というこの時期の保育目標を十分かなえているのではなかろうか。つまり、

・気持ちのよい戸外でのびのびと過ごす。
（砂遊びがおもしろければ促されなくても外に出て遊ぶ）
・自分のやりたいことを見つけて楽しむ。
（物の性質を知る、性質に合わせた利用の仕方を工夫する、試行錯誤の途中でさまざまな発見をするなど）
・遊びへの共通の興味をもった子ども同士が出会う。
（遊びを通して相手の性格、要求を知り付き合い方を学ぶ、新しい発想を取り入れ自分の世

界を広げる、いっしょにする楽しさとけんかをする悲しさ、くやしさも味わう）

いわゆる実習生の援助は子どもの年齢や時期によっては間違いではないが、五月の保育のねらいと子どもの実態にふさわしいとは言いかねる。保育とはいつもその時の子どもの状態によってねらいと方法を工夫することである。記録からは、先の場面の保育者は何の援助もしていないように見えるが、子どもの主体性を大切にし、子ども自身が経験し感じていることに共感しながら見守っていることがわかる。それが最良の援助であり、また、もっともむずかしい援助とも言えよう。ここでの保育者のねらいは、○○遊びという形をどう展開させ活動を盛り上げるかではなく、それぞれの子ども



が体験し感じていることがその子の成長にどうかかわっているかを見極めることである。次の保育の計画はそれをもとにたてていく。Hがただ砂をもてあそんでいるように見えても、その間に砂の特性を、踏みしめる足を通し、握る手を通して堅さ、もろさ、温度、湿度などを感じ取り、これで何ができるだろうと思いめぐらせる大切な時になっている。

次の段階では、乾いた砂は滑り落ちやすく、なかなか高く盛り上げられないことに気づき、何か方法はないかとあたりを見回す。これは積極的な探求の姿勢で、大人の世界でもおよそものごとの成功の鍵は先人の研究成果を活かすことと広く情報を求めて参考にすることであるように、Hは年長児の山作りの技法を学ぼうとしている。その年長児のやり方も代々先輩から受け継がれたものであろう。結果の成否よりも認めてやりたいのはそ

の姿勢である。同じように大きな山を作りたいと思いながらHの様子を見ていたGが、協力を申し出るとHはすんなりと受け入れる。一人ではとても無理なことがわかってきたのと、同じ目的をもった友達といっしょに遊べることが嬉しかったのであろう。しかし、二人でおもしろがって水を運んだため山は田んぼのようになってしまう。それをこねまわすのも新しい経験で砂に水を混ぜると固まることを実感し、おにぎりだ、おだんごだといって遊びはじめる。

偶然できた状況を利用して別の遊びに移るのはこのころの子どもの特徴である。女の子たちがおにぎりのトッピングからケーキの飾り付けを連想してケーキ屋さんになったように、また、道が川になり、丸木橋をつけたことから「がらがらどん」ごっこを思いついたように。

「がらがらどん」ごっこが自然発生したことは見過ごすには惜しい活動で、なんとかして筋書き通りに物語を進行させたいし、役割も分担させたくなる。また、昨日読んだ内容がどれだけ子どもの中に浸透しているかも確かめたくなるだろう。

しかし、HとGは、棒切れを橋に見立てたことで川は深くなり、山はいよいよ高く感じられるようになった。まるで昨日の「がらがらどん」のお話しの舞台のようだと想像が広がる。二人の思い入れがもっとも強いのが橋であるゆえに、橋の上と下でがらがらどんとトロルとのやりとりだけを繰り返して満足しているのだと思う。その気持ちに共感することが適切な援助を生む基盤になることをこの砂場遊びは物語っている。

（元松山東雲短期大学）